

「留学生と地域社会」

—留学生を通ずる新たな国際交流の視点を探る—

阿波村 稔

はじめに

1. 留学生アドバイジングという仕事
 - 1-1. きっかけ
 - 1-2. 日仏交流と留学生
2. 新潟大学と留学生
 - 2-1. 日本人学生によるボランティアな活動
 - 2-2. 留学生間の交流・支援
3. 留学生と地域交流
 - 3-1. 山古志村プロジェクト
 - 3-2. FACE-NET の立ち上げ。
 - 3-3. 「総合学習」と留学生

(資料)：ISAN シンポジウム講演録

Key Words：留学生、留学生アドバイジング、国際交流、地域交流、総合学習

はじめに

4月に初めて大学教員として留学生センターに赴任した。新潟は、はじめての地であり、留学生の生活相談・指導もはじめての経験である。前任の中村先生の紀要に書かれた「引き継ぎ書」を座右の銘としながらの一年間であった。その中でも印象に残る留学生との新しい試み、地域の方々との素晴らしい出会いがあり、留学生を通した一つの国際交流のあり方を模索できたのではないかと考えている。本稿では留学生センターに勤めるきっかけとなった前任地フランスでの国際交流、新潟での新しいプロジェクト、留学生自身による新しい活動を振り返りながら、今後、大学・留学生・地域の結びつきの中からの国際交流のあらたな可能性を探っていきたい。

1. 留学生アドバイジングという仕事

1-1. きっかけ

- 1) 昨年の3月までは、日本の銀行のパリ支店で支店経営の仕事をしていた。歴史のある海外、国際業務を中心とする銀行だったので、赴任地での日本人会とか商工会議所、日本人学校の経営等にもボランティアで携わる機会が多く、銀行の業務の合間にその国の官公庁、企業、地域の国際交流関係者や団体との付き合いを余儀なくされた。日本の銀行をめぐる経済環境は90年代に入って急速に悪化し、利益を維持するには営業活動に専念して、一方で、経費の圧縮をはかる必要があった。そこで、収益を生まない外部での奉仕的な仕事は見直してはどうかという議論も幾度となく繰り返され、民間企業としての赴任地での地域との交流活動は相当厳しい状況になっていた。
- 2) 一方、欧州経済がEUの統合を成し遂げ独仏を中心とする大きな市場が形成されたこともあって、日本の製造業のフランスへの進出は、自動車産業を中心に年々盛んになっていた。パリの日本人学校は、欧州でも数少ない児童・生徒数が増えている学校である。海外の国際交流の担い手は、今や、商社や銀行ではなくメーカーに移っていくべきだと思った。ただ、いざ役員になってボランティアにその役回りを引き受けてくれる会社は多くはない。やはり、銀行というのは、本来、多くの顧客と取引を行い、預金を預かり、アドバイスも行っているわけで、地域の中でも一定の社会的役割を果すべきだと思っている。
- 3) このような環境のもとで、最後の2年間は在仏商工会議所の会頭を務めさせていただいた。フランスの企業や地方のトップや各種の国際交流団体との交流活動が非常に活発で昼夜忙殺されたが、この間に留学生に関わる教育、アドバイジング業務に関心を持つようになった。

1-2. 日仏交流と留学生

- 1) 歴史的にも大変良好な今日の日仏関係を考える時、忘れてならないのが、在仏日本社会を積極的に支援してくれる親日派フランス人の存在である。フランスの1960年代は、68年をピークとする学生運動の盛り上がりのなかで、思想的には中国の「文化大革命」の思想的な流れが一世を風靡し、優秀な学生は留学先として中国を目指した。志願しても留学の枠が取れず溢れる状況だったらしい。当時、若くして中国への留学を目指し果たせなかった学生は、次善の留学先として日本を選択した。これには、後日談がある。当時のエリートと呼ばれる人たちは、中国にあこがれて渡中したが、留学先で見たもの経験したものは文化革命下の固有の文化に対する劣悪な教育環境と思想教育だった。文化に誇りをもつ国民としてこの状況は許し難かったという。多くの留学生は失望して帰国したそうだ。
- 2) 一方、現在、日仏交流の中心となって定年後も献身的に活動してくれているフランスの

有力者の一人は、この時期の日本への留学生であった。その時期に日本に夫妻で派遣された多くの留学生は、当時の日本における手厚いもてなしに感激し、帰国後、その夫人達が中心となって「すずかけの会」という親睦会を創った。総勢約100名で日仏半々、活動も「日本人のためのフランス講座」、「フランス人のための日本語講座」のほか、種々の美術、専門的な講座や文化イベントが分科会形式で開催されている。最近では、若い日本の駐在員の夫人も参加して異国での生活に早く慣れ、その国の文化に親しむ上で大きな手助けとなって感謝されている。

3) 在仏の日本商工会議所の活動は、官民の日仏関係を通じて育まれた地域社会でのいろいろな催しや国際交流への参加の機会が目白押しだった。春・秋のシーズンともなると銀行の内部との仕事のスケジュール調整に大いに苦勞した。それでも、出来るだけ時間を割いて種々の団体のイベントに顔を出すのは半ば義務だと思って参加した。「郷にいつては郷に従え」ということわざがある。退屈で冗長な会合があったり、夜半まで会話の続くディナーがあっても、このような機会に付き合っこそ、真の交流が芽生え育っていくものだと感じるようになった。

4) 日本では、最近、外資系の進出が目覚しく、ルノーのニッサンへの資本参加、カルフルの日本進出、エルメスの銀座店の開店など、特にフランス資本の進出が顕著である。これら進出の基礎をつくったのが、1950~60年代の日本への留学生である。彼らが在日のフランス商工会議所で80年代から活発に活動し、日本の良さ、潜在力を評価し、帰国後フランス人の啓蒙に努めてくれている。

5) 最近、いろんな意味で注目を浴びている企業、たとえば新生銀行（インド人）、ニッサン（フランス人）、マクドナルド（米国人）などで外国からの専門性をもつ若い優秀な人材が活躍している。日本の産業・経済全体が古い体質の部分に引きずられて閉塞感が漂っている中で、日本人が外国の若い新鮮な感性を持つ人材ともっともっと交流をもち、一方では、留学生に日本を理解してもらってあらゆる方面で活躍してもらうことが、今の日本を活性化させる重要な鍵ではないかと思う。

2. 新潟大学と留学生

以上のような経験の中で、留学生に対するケアの大切さを認識し、自分自身の海外経験、とりわけ、パリにおけるボランティアの「公務」を通じて得られた地域・国際交流の貴重な経験を生かすことのできる絶好の職場として、新潟大学の「留学センター」での留学生アドバイザーを中心とする仕事に興味を持った。幸いにも昨年4月からその機会を得て留学生の生活相談・指導にあたってきた。

新潟大学における受入れ留学生に対するサービス態勢については、他の大学と同様に留学生センターが中心となって全学的に行なっているが、それに加えてボランティアな日本人学生による活動や留学生自身の組織化された活動が非常に盛んである。また、留学生の生活のすべての分野をカバーするには到っていないが、地域社会との関係で、日本人学生、留学生と大学の教官が一体となって地域の交流活動に従事出来れば、大きな力となることは間違いない。この点については、6月27日に静岡大学で行なわれた文部科学省等の主催する「留学生交流研究協議会」のシンポジウムでパネリストのひとりとして発表した。

(注) 平成14年度 留学生交流協議会報告書 (中部・近畿地区) p. 155 - 159

2-1. 日本人学生によるボランティアな活動

- 1) 本学には「国際ボランティアサークル」(通称「国ボラ」)という学内のサークルがある。法学部の先生の指導により1993年に結成され、県レベルの国際ボランティアサークルにも属している。留学生が増えた96年くらいから活発になって今でも100名程度のサークル員がおり、60名前後の学生が実際に活動している。4月、10月には到着する留学生の駅や空港へのお迎え、学内ツアー、新潟での生活案内を留学生と共にしている。また、毎月0の付く日には国際交流会館で夕刻「コーヒーアワー」として、交流のパーティーを企画している。月に3回は行なわれるということで、新入の留学生にとっては先輩、日本人学生とのかけがえのない情報交換の場となっている。
- 2) この他、季節に合わせて様々なイベントが行なわれているが、ユニークなのは、このサークルが中心となって留学生センターで週2時限、2クラスの日本語教室を初級、中級に分けておこなっていることである。参加は、日本人の学生、新入の留学生、学内の留学生を含めてオープンである。正規の授業ではないが、外国人に日本語を将来教えたいという学生と留学生とのいい情報交換の場となっており、最近の学生用語や、専門の分野の日本語についての疑問を日本人学生をつかまえて質問している。
- 3) 留学生のための課外活動を実施する際、この「国ボラ」に助けもらった。特に、今年度は春から新しい「山古志村プロジェクト」を年間3回のシリーズで立ち上げ実施したが、廃校を利用して自炊での田植、稲刈りだったので、日本人学生の手助けは大いに助かった。

2-2. 留学生間の交流・支援…「新潟大学留学生会」を中心とする活動

- 1) 本学では、留学生の間および留学生に対する情報の伝達、交換、交流活動が組織的に行なわれている。これは前任の先生による各国代表者を集めてのホームパーティ、これをきっかけとした留学生会の結成によるところが大きい。新潟大学留学生会(通称 ISAN)は一昨年(2001年の春)結成された。世界を15の国の地域・言語圏に分け、それぞれの代表が理事となる。中国の代表が2人いるので16人の理事によって構成され理事会が毎月一回開

催されている。理事の任期は一年で、理事の互選により会長が選出される。理事会は留学生センターの地域交流促進室で行なわれ、議題に応じて地域のボランティアの団体、小学校の教員も参加している。また、相談指導部門の教官（小職）が顧問を務めている。

2) ISANの主な役割は、①留学生同士の支援 ②大学に対する窓口 ③地域社会との連携の窓口であり、县市町村それぞれのとの交流、自主的なシンポジウム等の開催と数々の実績がある。本年度は、ワールドカップ2002新潟大会（6月）の開催、で留学生に対して地域からの各種イベントへの支援要請が多くあった。また、恒例の内野市民運動会（6月）への参加、県教育委員会からの依頼による交流会（7月）、10月には、新潟のふるさと村での2日間の「地球市民フェスティバル」での一部の企画・運営を県から予算付きで任されたが、20カ国80人以上の留学生を動員して見事に成し遂げた。

3) また、11月には「留学生の役割と日本社会への貢献」と題したシンポジウムを県の交流委員会、大学の支援の下、開催した。ISANの理事メンバーが中心となって自主的に早くから企画を練り、留学生を送り出す側からフィリピンの大使館の文化担当官、受け入れる側としてアジア・シードからの講演者招き、留学生、日本人学生を交えて、アジアとの留学生交流の大切さなどをテーマに活発な討論が行なわれた。

（資料：シンポジウムの講演録参照）

4) 留学生と地域のつながりに特記すべき事項として、小中学校・公民館などの『国際理解教育』への場に対する留学生の派遣がある。詳しい経緯と実績、今後の方向性については、後述の「総合学習への取り組み」をお読みいただきたいが、県下の20以上の小中学校、公民館に教師として派遣した。この取り組みは、留学生センターの事務・教官による地域支援事業でもあるが、具体的な人選にあたっては、ISANのネットワークの貢献が大きい。

5) 新潟独自の文化拠点としての利点を生かすという観点からは、本年度は「琴リニピック」という大正琴の全国レベルのコンサートに、16人の留学生が急遽練習して参加し大変好評を博した。これには当初、市の文化部長からの誘いかけがあり、留学生自身が大正琴を縁に日本の歌に挑戦したもので、今ではイベントの度に披露できる腕前になっている。そもそも新潟は大正琴愛好家の多い地域であり、その後、地域の住民との交流会での演奏も行っており、新潟の地域社会との交流、とりわけ文化を通じた国際交流に一役買っている。

3. 留学生と地域交流

・・・地域社会からの支援、支援を超えて交流へ・・・

新潟大学の留学生に対しては、地域のボランティアの人々、団体から各種の支援が行なわれている。バザーの開催、各種パーティー、ホームステイなどのプログラム、また、日本文

化を直接に体験する意味での地区運動会、夏のキャンプ、夏祭りや民謡流し、冬のスキーへの招待など、数々の機会が存在する。これらは、いわゆるイベント型の国際交流であり、この重要性を否定する必要はないが、より深い交流を目指す工夫とそのインフラ作りも必要になってくる。この意味から、本年度取り組んだ3つの事業を紹介したい。

3-1. 山古志村プロジェクト

1) 経緯：

(1) このプロジェクトは、小千谷を東に登った古志郡山古志村の休耕田を利用し、村の人たちと一緒に、まぼろしのもち米「梅三郎」を育て上げる留学生センターと山古志村の共同プロジェクトである。そもそもは過疎から廃校に追い込まれた山古志村の小学校の校舎とすぐ近くの教員宿舎が空家になっていたものを留学生などのために使えないかとの話が、同村出身の新潟大学の先生からあったのがきっかけである。留学生センターがこれに即座に呼応して現地を視察し、その後、「山古志村プロジェクト」として立ち上げ、留学生、「国ボラ」の代表者などが訪問して始まった。山古志村は自然が豊かで、美しい棚田が残されている他、千年にわたる伝統をもつ牛の角突きなど日本の原点を残している村である。春、夏、秋、冬それぞれ、山菜取りから、雪の中での火祭りまで様々な計画を立てられ、何れも参加者が予想外に満足する結果となっていた。また、これがきっかけで村の役場に留学生が国際交流員として一年間就職することも実現した。

(2) このような昨年度までの実績をもとに、留学生の間では、美しい棚田で「田植」はできないかという声が起こり、着任草々、村の方々との交渉を行なうこととなった。その結果、村の役場の骨折りで東竹沢地区の休耕田を貸してくれる方を見つけてもらい、その地区全体のプロジェクトとして「田植」、「稲刈り」を計画しようということとなった。その上、苗は、その土地でもまぼろしとなっていた『梅三郎』というもち米を植えようということになって、冬には獲れたもち米で留学生が餅つき、「かまくら」を作って中で頬張ろうという「田植、稲刈り、餅つきの三部作」の計画に発展した。

2) 本年度の取り組み：

(1) このような経緯があって、5月には、鶯の鳴く棚田での「田植」が実現した。前日、村に入り手掘りトンネルを見学したあと、教員宿舎で自炊と共同生活でみんなの呼吸はぴったり合った。翌朝、早くから村の人の軽トラックで「我らが田んぼ」に向かい留学生と日本人学生も加わり20人で、田んぼのぬかるみとの格闘が始まった。村の人は伝統的な手法でという願いもあって、田植の前には六角形の木枠によって区画を「枠決め」することを復活させた。

(2) 9月には炎天下で留学生15名が参加して稲刈りを実施した。実った稲は「手刈り」、その後、自ら結ったわら縄で「まるけて」、急勾配の杉林の幹の間に「はさ架け」し自然乾

燥させた。村の人々にとって、田植、稲刈り等の農作業の後は、村あげての小さな“お祭り”となる。今年は、これに留学生をまじえた交流が加わった。

- (3) 留学生との交流会には、回を重ねるごとに新しい顔ぶれが加わる。「来年の春には古い田植歌を是非聞かせてください。」「今日、生まれて初めて外国の人と話した。遠くの異国の歴史を直に教えてもらった。短い間で学んだ留学生の日本語にはびっくりだ。来年も是非来てくれ。」といった会話でお酒もお国自慢も盛り上がった。
- (4) 冬の山古志は3メートルを越える雪に覆われる。今年の2月には自分達で育てたもち米で餅をつき、かまくらの中で夜通し語り合いながら頬張るといふ「かまくらまつり」が村の好意で実現した。この村をあげての祭りに、長岡科学技術大学の留学生にも声をかけたこともあって、総勢70人の学生が参加し、村のバンドも特別出演した。村の年寄りの昔からの知恵を頼りに巨大なかまくら、雪灯ろうをつくり交代して餅をつき、夜を徹しての交流会で、留学生は雪国の暮らしを思う存分楽しんだ。
- (5) このプロジェクトでは、留学生センターは交通手段を提供し、村の人々が農作業を指導しての共同作業、そして、村のお年寄りが雪国の伝統的なまつりを企画してくれた。交流会では、村の人たちの炊き出しから始まって、宿舎の手配など山古志村役場の全面的バックアップがあった。
- (6) こうして、まぼろしのもち米“梅三郎”プロジェクト「田植」「稲刈り」「かまくら」の三部作の一年目は終わった。「教えるは学ぶの半ば」という言葉がある。今年4月に新潟に着任した私にとって、新入の留学生とのこのプロジェクトは、日本の原点を体験するまたとない貴重なチャンスだった。異文化との接触においては「文化変容のカーブ」からも最初の6ヶ月～一年間が最も大切な時期であり、参加した新入の留学生達にとっても忘れ得ぬ新鮮な体験となったことだろう。この間の経緯については、新潟大学「学報」(平成14年10月号23頁、「教育研究情報」)にも寄稿した。

3-2. FACE-NETの立ち上げ。

- 1) 留学生センターでは、毎年、留学生を中心とした様々な地域との交流の機会を設けている。イベント型の交流に加えて、留学生の持っている言語、文化面での知識、ノウハウを短い時間で吸収したいとの発想から、小中学校の総合学習の時間に、多くの派遣要請が寄せられている。ただ、外国人を招聘して一方的に異文化を教わるといふ授業も必要だが、受け入れる側も与えられるものを持って交流を進めていくことが大切である。また、日頃の相互理解とそれを仲介する役割が重要性である。このような様々な形での留学生による地域での交流の機会を、400人余の留学生にすべての行事の情報をタイムリーに伝達することは、大変困難であると気づいた。留学生課、各部局に貼り紙をしても、広いキャンパ

スでは目に触れる機会も少ない。また、小中学校の総合学習への派遣要請があったときにも、留学生の中でタイムリーにかつ的確な人材を探しあてるには限界がある。

- 2) 「FACE-NET 新潟」は、このような現実的なニーズから、課外活動の情報や地域からの留学生派遣要請を速やかに伝達する手段として立ち上げた。その趣旨と活用方法は以下の通りで、地域、留学生にメンバーとしての登録を募っている。

「FACE=NET 新潟とは？」…以下、呼びかけの要約

- (1) FACE とは、Friendship And Cultural Exchange の略称である。FACE=NET 新潟(以下 FACE と略す) は、新潟大学の留学生と日本人のボランティアが、基本的には一対一で交流するための face to face のネットワークである。FACE では、日本語で日本人と交流することを原則としている。日本語を話そうという意欲のある留学生なら誰でも参加できる。留学生のほか、家族、外国人研究員や研究員なども参加できることとした。
- (2) 留学生センターは、このネットワークの拠点として、国際交流活動の情報の取りまとめや配布を行なう。(日本語教室、ホームステイ、村へのツアー、コンサート、バザーの案内など) また、「総合学習」への派遣など、お互いのニーズからの出来るだけの出会いを実現させたいと考えている。
- (3) 留学生と日本人の方のお互いのニーズを発掘し、その中から数多くの出会いを実現するために、FACE-NET のメンバーに登録することをお勧めする。メンバーになるには、申込書の記入と、皆さんの特技、活動をあらかじめ登録していただくアンケートも記入ください。また、Eメールの登録は不可欠である。
- 3) この試みを、公開講座の場でも紹介したところ、多くの地域ボランティアの方々から好意的な反応があった。一方、留学生には、翻訳もつけて配布中であり、これまで小中学校への派遣要請に応じてくれた学生を中心に登録が進んでいる。また、この考えを教養の授業「留学生と国際化」で授業の感想文を書かせたところ、大多数の日本人学生が留学生との交流を望んでいるのにその具体的な手立てを見出し得ないという事実気が付いた。そこでこの FACE の趣旨を話したところ、多くの賛同者がでてきて、留学生・日本人学生・地域住民のネットワークをつくるにも有効だということがわかってきた。
- 4) この FACE-NET のネットワークは、留学生と大学・地域社会を結びいわばハブ(ネットワークの中継地)としてのインフラである。その利用方法については、情報の伝達から始まって、メーリングリスト的な情報交換、また、一歩進んで、それぞれのニーズのマッチング(結び付け)まで考えられる。いずれにせよ、留学生課、留学生センターの教官が中心になって試行錯誤の中で少しずつその利用法を広げていくつもりである。

3-3. 「総合学習」と留学生

- 1) 「総合学習」とは、下記の文部省のホームページに示されている通り、正式には『総合的な学習の時間』のなかで本年度から本格的に実施されることとなった小中学校の学習活動である。その趣旨から「国際理解教育」が一つの柱として掲げられ、留学生が身近に生活している地域では、留学生を活用した授業や催しが盛んになっている。小中学校の児童・生徒にとって、留学生から直に外国の生活・文化の紹介を受け、直接疑問点などを質問できることは、新鮮な異文化体験が教室で実現できることとなる。とりわけ、異国の高等教育機関で学ぶ留学生の持つ国際的に通用する高いコミュニケーション技法は大きな刺激となっている。一方、留学生にとっては、専門分野の学業の合間に地域社会貢献の意味から、ボランティアに派遣要請に応じているものであるが、日本の地域の教育現場に直接触れ日本語で自国を語ることは、より高度な日本語の修得とより深い日本理解につながるものとなる。
- 2) 新潟大学には40カ国以上の国からの400人を超える留学生が学んでおり、留学生を通じた数々の国際交流の場を提供している。留学生センターでは、「総合学習」の本格的な実施に先立って数年前より留学生を小中学校への派遣を実施してきた経緯がある。試行錯誤の段階でもあり派遣に際してのルールもなかったが、市の教育委員会との話し合いで小中学校からの正式な派遣依頼を留学生課に提出してもらい留学生センターで適当な人材を斡旋することとした。留学生を地域の貴重な資源と考え、留学生によるこの種の活動は、受入れ側、留学生双方にとって身近に異文化に接することのできる貴重な国際交流の場であるとの観点から、大学としてもできる限りの派遣要請に応じてきた。
- 3) 本年度は、本格実施の初年度として多くの派遣要請があった。実施に際しては、授業内容のモニターと今後の内容の充実のため、双方から実施報告の提出をもとめまとめることとした。おおむね好意的な評価がなされているが、事前の準備期間が十分にとれない、児童、生徒のより深い理解のために一回の授業でなく継続して実施したいなど、実施にあたっては改善の余地も多々残っている。また、「総合学習」に関する留学生への理解のために『『総合的な学習』参加への心得』を留学生センターで作成し学生に事前に配布できるようにした。
- 4) 今後の方向性としては、より深く幅ひろい「国際理解教育」を実施できるように、派遣側、受入れ側双方で情報交換を密にして内容の充実を図ると共に、教材や機材の面での支援を行っていく必要がある。具体的には、関係者と専門の教育研究者を交えたシンポジウムの開催で効果的な授業の方法についての意見交換を行うと共に、派遣にあたって、プレゼンテーションの機材の貸し出しなども行って、留学生自身の負担の軽減もはかる必要がある。また、送り出す大学としても授業目的の明確化、適正な留学生の選定、さらにはニーズに応じた教材の提供や事前研修の場の提供などで支援を図ることが必要である。

5) また、今後、その内容の改善、高度化を果すためには、大学の教官、職員だけではなく教育の当事者である留学生自身の手による改善努力が生きた国際理解教育のためにも求められることとなろう。大学としては、自らが地域と留学生との仲介者になると共に、留学生によるこれまでの活動の成果を蓄積し、今後の活動についても十分なサポートを行う必要がある。

6) 具体的には、留学生自身による企画、実施にあたっての種々のサポート態勢を実現させたい。幸いに留学生自身による支援組織である ISAN（新潟大学留学生会）が一昨年発足して活発に活動しているが、その中にプロジェクトチームをつくってもらい、派遣授業に関する実地調査、必要機器・機材の洗い出し、さらには、授業方法に対する提案も行わせたい。いわば、留学生自身による仮想の「派遣事業体」を立ち上げ、将来はそのマネジメントを任せる形を模索してみてもどうか。

(参考資料)

「総合的な学習の時間」とは

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/020501.htm

結びにかえて

留学生は大学の宝であるのみならず、地域の宝物である。留学生が、目的、使命感を持って日本に滞在する間に、次世代を担う児童・生徒や貴重な日本の文化を守り育てている新潟の地域の人々に直接することのできる貴重な機会が、「総合学習」や様々な文化・伝統を基盤とした地域での国際交流の場を通じて与えられている。このような貴重な機会をもっと認識し、これを意識的に活用することで、より深い国際交流・国際理解につなげていくことが十分に可能であると考えている。

(Abstract)

From my experience of the first year at Niigata University, I found that it is important for the international students to have enough opportunities to have a regular contact with community people including Japanese students in the early stage of their stay in Japan. It is also very important for community people including young generation to have an educational and a tradition-based exchange with them for better understanding of each culture. This is a report to show several extracurricular programs, which I have organized and developed cooperating with the International Student Office of Niigata University.